

守護町勝瑞があつた徳島県板野郡藍住町は徳島市の北隣に位置する。町の東端にあるJR藍住駅から数分歩くとかつての守護町の中心部に着く。現在は一見、よくある郊外のベッドタウンであるが、一六世紀には日本有数の「都市」であつた。

こゝは、遅くとも一五世紀後半から天正一〇年（一五八二）まで、一〇〇年以上、阿波国の中心地であつた。ここには、阿波守護細川氏はもちろん、次の室町將軍候補の足利氏や、幕府管領家の細川氏が居住した。一六世紀、こゝを基盤に台頭した三好氏は、京都で中央政界の覇権を争うまでになつた。そして、ついに三好長慶は室町將軍をしのぎ、織田信長に先んじて事実上の「天下人」となつたのである。

一六世紀末期以降、守護町の痕跡は徐々に失われ、人々の記憶もうすれていった。しかし、平成六年（一九九四）、藍住町教育委員会が勝瑞城跡の発掘調査をおこない、さらに平成九年に勝瑞館跡が調査によつて発見されるとその遺跡としての重要性から勝瑞は全国的な注目を集めるようになった。

武家の館や城を中心とする屋敷群、寺院、町屋、港津などが広域に広がる守護町勝瑞は、一六世紀の地方政治拠点のなかでもとりわけユニークな空間構造をもつ。藍住町や徳島県教育委員会の情報発信や働きかけに応じ、全国の歴史学（文献史学）、考古学、地理学、建築史学、城郭史、庭園史などの研究者がこの遺跡に注目するようになり、毎年のようにシンポジウムや研究会が開催された。また地元の市民の関心も高く、研究成果を伝える講演会場はたいへい満員の盛況である。

このように歴史的な価値が高く、研究者・市民の関心を集める勝瑞について、その都市構造や遺跡の範囲を確

定するため、平成一九年、守護町検証会議が設置され、学際的な共同研究がはじまった。会議の成果は平成二六年三月に報告書にまとめられた。その成果を基礎に、より多様な視角から勝瑞の意義を明らかにし、多くの方々に勝瑞研究の到達点を理解いただくために本書を刊行することとした。

本書の各論放をつうじて守護町勝瑞の歴史的意義が徳島県内・県外の多くの方々に伝われば幸いである。そして勝瑞遺跡が、地域の宝となり、全国の政治拠点研究の鑑となることを期待している。

二〇一七年一月

仁木 宏

はしがき.....仁木 宏 i

序 章 勝瑞研究と中世都市史.....石井伸夫 3

第一節 勝瑞の位置と環境、および歴史について 4

第二節 廃絶後「勝瑞像」の変遷について 7

第三節 都市史研究のなかの勝瑞 17

第1部 守護町勝瑞の構造

第1章 発掘調査から考える守護町勝瑞の範囲と構造.....重見高博 41

第一節 守護町勝瑞の成立と都市的展開の様相 42

第二節 勝瑞城館の構造とその変遷 49

第2章 文献史料から考える守護町勝瑞……………須藤茂樹 65

第一節 戦国期阿波に関する史料の残存状況 67

第二節 勝瑞移転前夜——初期守護所秋月—— 68

第三節 守護町勝瑞の形成と発展 72

第3章 守護町勝瑞遺跡における寺院の立地とその存立基盤……………石井伸夫 97

第一節 地名・伝承および石造物分布状況からの検討 98

第二節 発掘調査成果からの検討 103

第三節 文献史料からの検討 107

第四節 勝瑞寺院街区と徳島城下寺町との関係について 115

第4章 室町・戦国期における勝瑞の立地と形態……………山村亜希 126

第一節 国絵図にみる地形環境と街道の変遷 128

第二節 北千間堀と勝瑞津 135

第三節 細川氏・三好氏による勝瑞の都市整備 140

第5章 勝瑞館の景観と権威空間としての意味……………小野正敏 147

第一節 権威表徴としての大名館の空間概念と家格 148

第二節 発掘された勝瑞館 152

第三節 守護細川館と三好館 156

第四節 三好義興邸の權威空間の復元 166

補論1 城郭史における勝瑞城館……………千田嘉博 176

第一節 守護系館城としての勝瑞城 178

第二節 館城群在タイプから戦国期拠点城郭へ 180

第三節 戦国期拠点城郭としての勝瑞城館再考 182

第四節 ふたつの戦国期拠点城郭——阿波の館城と畿内の山城—— 185

第五節 勝瑞城館に見る平地城館の戦国期拠点城郭化 186

第2部 守護町勝瑞と戦国社会

第6章 勝瑞津と聖記寺の創建……………福家清司 193

第一節 「勝瑞津」史料の検討 195

第二節 吉野川水運と勝瑞津 201

第三節 守護所勝瑞と聖記寺 205

第7章 歴史的景観復原から見る勝瑞とその周辺……………福本孝博 215

——鳴門市大麻地区の検討を中心に——

第一節 守護町「勝瑞」の研究経過と問題点 216

第二節 鳴門市大麻町の歴史地理学的景観復原 219

第8章 勝瑞と修験道……………長谷川賢二 227

——戦国期阿波国における顕密仏教・寺院をめぐる一視点——

第一節 勝瑞における山伏の様相 228

第二節 聖護院道興の勝瑞逗留 232

第三節 勝瑞と山伏集団——「阿波国念行者修験道法度」再考—— 241

第9章 勝瑞をとりまく村・町・モノ……………島田豊彰 250

第一節 戦国期阿波の集落遺跡と勝瑞 251

第二節 モノからみた周辺遺跡と勝瑞 269

第10章 戦国阿波の政治史から考える勝瑞……………天野忠幸 277

第一節 阿波守護細川氏の在国と勝瑞 278

第二節 阿波三好家の成立と勝瑞 285

第三節 織田政権との戦いと勝瑞 292

補論2 絵図資料からみた勝瑞……………平井松午 303

第一節 慶長度の阿波国絵図と勝瑞 304

第二節 寛永前期の阿波国絵図と勝瑞 307

第三節 寛永後期の阿波国絵図と勝瑞 309

第四節 「板野郡勝瑞村分間絵図写（仮称）」の分析 312

終章 守護町勝瑞と権力・地域構造——阿波モデルの構築——……………仁木 宏 322

第一節 日本の中世都市 323

第二節 守護所と戦国期城下町 325

第三節 細川氏・三好氏権力と守護町勝瑞 331

第四節 阿波国における勝瑞の位置 341

あとがき……………石井伸夫 349

執筆者紹介

序章 勝瑞研究と中世都市史

石井伸夫

はじめに

本書は、中世後期の阿波国に成立した地方政治拠点「守護町勝瑞遺跡」を対象に、考古学、文献史学、歴史地理学、城郭研究等関連する諸分野からの学際的検討を行い、その都市構造を可能な限り浮かびあがらせるとともに、都市が形成された中世から近世初頭における地域社会の推移について考察しようとするものである。

序章である本章では、勝瑞研究の成果と到達点を示すとともに、遺跡の調査・研究が直面する課題を明示することとし、その課題に対応するものとして、収載された各論文の位置づけを行いたい。

その際、検討の前提作業として、①守護町勝瑞遺跡の地勢と歴史を概観するとともに、②近世以降、現在にいたるまでの「勝瑞像」（勝瑞城館跡、およびそれに伴う都市の景観イメージ）の変化と研究のあり方を整理し、③これを全国的な都市研究史の流れに位置づけることにより、先述の課題把握に努めたい。

なお本章を含め本書においては、勝瑞の検討に際して「勝瑞城跡」「勝瑞館跡」「勝瑞城館跡」「守護町勝瑞遺跡」という、異なる概念からなる四つの用語を併行して使用することとなる。ここでは、その相互関係を明らかに

にすることを目的に、各概念の定義づけを行う。それぞれの定義は以下の通りである。

【A】「勝瑞城跡」は、見性寺境内に現存する濠と土塁に囲まれた区画を指す。昭和三十一年（一九五六）に県史跡に指定され、平成六年（一九九四）以降の発掘調査で、勝瑞廃絶直前に構築された出城的曲輪（まがらみ）との性格づけがなされている。

【B】「勝瑞館跡」は、平成九年（一九九七）以降の発掘調査で、「勝瑞城跡」の南側一帯で順次確認された、大型の濠に圍繞される複数の区画（館群）を指す。土塁等の防御施設は確認されておらず、複数の庭園遺構や大型の礎石建物跡に象徴される居館の性格を持つ区画である。

【C】「勝瑞城館（跡）」は、最終段階で一体的な機能を果たしたと考えられる「勝瑞城跡」と「勝瑞館跡」の総称である。勝瑞の政治的中心機能を持つ区画であり、平成一三年（二〇〇一）の国史跡指定名称でもある。

【D】「守護町勝瑞（遺跡）」は、「勝瑞城館跡」を中心に、その周囲に広がると考えられる寺院跡、町屋跡、街道および港津遺構、惣構跡等の都市要素を総合した広域都市遺跡を指す概念であり、文化財保護法にもとづく「埋蔵文化財包蔵地」の名称でもある。この四つの概念は、【A】と【B】は並立しつつあわせて【C】を構成し、【C】は【D】に含まれる関係となる。

以下、本章および本書収載の各論文においては、上記の定義にもとづき、四つの概念を適宜使い分けながら論を進めていくこととしたい。

第一節 勝瑞の位置と環境、および歴史について

本節では守護町勝瑞遺跡（以下、必要に応じて「勝瑞」と略す）のおかれた位置と環境について検討するとともに、その歴史的展開について守護所設置以前の時期も含めて概観したい。

まず勝瑞の位置と地理的環境について整理する。勝瑞は、徳島県の北東部、現在の板野郡藍住町の東端に位置する。当該地域は徳島県北部を東西に貫流する吉野川の下流域にあたり、吉野川が形成する広大なデルタ（三角州）のほぼ中央にあたる。地形はきわめて低平で、乱流する旧河道の痕跡を多く確認することができ、河道跡のあいだに微高地が点在する地形となっている。現状では地域の南側を吉野川の本流が貫流しており、北側にはこれと併行するように旧吉野川が同じく東西に流れている。中世段階ではこの旧吉野川が吉野川の本流であったと考えられており、川幅も地形等の分析から現状の三倍以上の大河川であったと考えられる。勝瑞はこの旧吉野川（中世の吉野川本流）の右岸に沿って展開しており、デルタ地帯の中心に位置するとともに、旧吉野川が形成する自然堤防帯の下流側の限界点に位置しているともいえる⁽¹⁾。旧吉野川は、勝瑞を過ぎた地点から南北二方向に分流しており、中世では、北側の水路（旧吉野川）は撫養に、南側の水路（今切川）は別宮に通じていたとされる⁽²⁾。撫養・別宮とも文安二年（一四四五）の『兵庫北関入船納帳』に記載された港町であり、水運を意識した立地であったと思われる。

次に、勝瑞の歴史について略述する。勝瑞は、中世後期に阿波国守護であった細川氏の守護所がおかれた場所であり、後年には、細川氏に取って代わった三好氏の戦国城下町が営まれた場所であるとされる。

細川氏による守護所建設以前の歴史については詳らかではないが、古くには小笠原氏の守護所がおかれたとの説があり⁽³⁾、徳島県史もこれを採用しているが、確かな根拠にもとづくものではない。わずかに住吉大社領井限莊に属していたことが推定されるのみであるが、近年、この莊園内に所在したと考えられる「勝瑞津」に関する検討が行われており、守護所移転以前からの拠点性についての研究が進められつつある⁽⁴⁾。

守護所としての勝瑞の成立時期については諸説がある。細川氏は建武三年（一三三六）に足利尊氏の命により四国の国大将として阿波に入部し、四国経営の拠点として足利氏の所領であった秋月に守護所をおいたとされる⁽⁵⁾。

その後、南北朝内乱の終息、康暦の政変を経て、阿波一国の守護としての地位が確定していくなかで、秋月から勝瑞に守護所を移転していったとされる。具体的な移転時期については、早いものでは①応安年間とする説⁶⁾、②明徳年間までとする説⁷⁾など、応仁の乱以前に成立時期を求めるものと、③応仁の乱以後の守護在国体制への変化に画期を求める説とがある。いずれにしても、文献による守護の勝瑞居住の初見は『後法興院記』明徳二年（一四九三）の条であることから、遅くとも明応年間には守護所として成立していたと考えられる⁸⁾。

その後阿波守護細川氏は、畿内の両細川の乱に関与し、勝瑞を起点に畿内の政争に参戦するようになる。その過程で台頭してきたのが、当時守護代クラスの有力被官として阿波細川氏の軍事部門を担当していた三好氏であった。三好氏は明応の政変以降、之長^{ゆきなが}、元長^{もとなが}（之長の孫）が再三にわたって畿内に出兵し、元長の子である長慶^{ながせき}の時期に畿内で覇を唱えるようになる。一方、阿波においては長慶の弟である実休^{じつきゅう}が天文二十一年（一五五二）に守護細川持隆を自殺に追い込み実権を掌握する。これ以後勝瑞は、細川氏の守護所から戦国大名阿波三好氏（実休の家系）の城下町へと都市の性格を変化させていくことになる⁹⁾。

実休が三好本宗家（長慶の家系）との連携にもとづき河内に拠点に移した後、阿波国は実休の子である三好長治^{はる}と、家宰としてこれを支えた篠原長房を軸に運営されるようになるが、天正元年（一五七三）の上桜合戦で篠原長房が三好長治に滅ぼされて以降は国内が混乱し、三好氏は求心力を失い、長治自身も敵対勢力の反抗を受け自害することとなる。このような阿波国内の状況は隣国土佐の長宗我部氏の侵攻を招き、長治の後継者となった十河^{せう}（三好）存保^{まもやす}は、天正一〇年（一五八二）に勝瑞近郊の中富川付近で長宗我部軍を迎え撃つも大敗を喫し（中富川の合戦）、讃岐に退いたことから、阿波における三好氏の本拠地勝瑞は廃絶することとなった。

勝瑞廢絶の三年後、天正一三年（一五八五）に、豊臣秀吉の四国平定にともない阿波に入国した蜂須賀氏は勝瑞を政治拠点として利用せず、当初、阿波国内最大の山城である一宮城に入った後、時をおかず現在の徳島に新

たに織豊系城郭を築き、城下町の整備に取りかかる。この際に勝瑞からは多くの寺院や商職人が移転させられたことから、勝瑞の現地には往時の姿をとどめるものが伝えられず、ほどなく田畑にかえり、近年の発掘調査によりその遺構が確認されるまで、阿波の守護所・戦国城下町は長い眠りにつくこととなった。

第二節 廃絶後「勝瑞像」の変遷について

本節では、文献史料を中心に近年の発掘調査の成果も援用しながら、中世末の勝瑞廃絶以後現代にいたるまでの、阿波国における「勝瑞像」の変化をたどることとする。その際、歴史学、また考古学等による詳細な検討については各論文に譲ることとし、ここでは近世以降に記述・編纂された二次史料を用いて、これらの史料が書かれた各時点において勝瑞がどのようにとらえられていたのか、各時期の「勝瑞像」に着目し、これを時系列にたどることにより、近世から近代・現代にいたる「勝瑞像」の変化の様相を明らかにしたい。

(1) 軍記物語から藩撰地誌へ

ここでは、近世初頭から中期にかけて成立した軍記・地誌等を取り上げ、そこに記載された「勝瑞像」を確認することにより、近世人の勝瑞に対する意識の変化をたどってみたい。

まず、数ある軍記物類のなかでも比較的早期に成立したものととして、元龜三年（一五七二）の奥書を持つ『古城記』（『阿波国徴古雑抄』所収）を取り上げる。これは、中世阿波国の城館について逐条的に列挙したいわゆる「書き上げ物」であるが、関連の記事としては、勝瑞の項の筆頭に「細川屋形」を記載するとともに、これとは別に「勝瑞屋形」が並記されている。それぞれの当主についても、「御屋形様」とされる「細川屋形」の細川真之と「勝瑞屋形」の三好長治・存保が対置されており、複数の中心核を持つ政治拠点像を示唆する記述となつて

いる。

次に、寛永年間（一六二四～四四）に成立したと考えられる『昔阿波物語』（『阿波国徴古雑抄』所収）の記述からは、①勝瑞に「市」と称される町場空間が所在したこと、②そこには一定の人口を有する「町人」と呼ばれる住民が居住していたこと、③彼らは「盗人」に対し自衛的な「合戦」を行う能力を有したことなど、商業的に発展した都市像を読み取ることができる。また、同史料の後段には、多数で多宗派からなる寺院についての記載がある。これは同じく近世初期に成立したと思われる「阿州三好記大状前書」および「阿州三好記並寺立屋敷割次第」（ともに『阿波国徴古雑抄』所収）に見られる寺院の書き上げとも内容的に符合しており、勝瑞の都市的發展を物語る根拠の一つとなっている。

以上、『故城記』および『昔阿波物語』の記述からは、複数の都市核を持ち、一定の人口を有する町場や多数の寺院が展開する発展した都市様相を読み取ることができる。このことから、勝瑞廃絶から時間経過の浅い近世初期の段階では、大規模に發展を遂げた都市像が存在していた可能性を指摘することができる。

一方、上記の諸史料からやや年代が下がった寛文三年（一六六三）に成立したとされる『三好記』⁽¹⁰⁾の記載を見てもみよう。

勝瑞の城と申すは、墓々數堀も掘らず、僅かに堀一重ばかり塗て、方一二町には不過、其内に櫓十四五程掻
双べたり

ここからは、一七世紀も後半に入り同時代の記憶が薄れていくなかで、大規模に發展した都市イメージが、単純・小規模でマイナーな政治拠点像へ変化していく様を読み取ることができる。

続いて、半世紀ほど時代が下った享保年間（一七一六～三六）成立の『南海通記』⁽¹¹⁾（香西元資著）にも、屋形構えの単郭方形館という、『三好記』に見られる勝瑞イメージを承けての記述が見られ、近世中期以降、シンプ

ルで小規模な勝瑞像が定着していく様子を確認することができる。

さらに、文化年間（一八〇四～一八）に編纂された藩撰地誌『阿波志』⁽¹²⁾の記事を取り上げ、近世後期の勝瑞像を確認するとともに、勝瑞像の変化の理由について整理したい。

勝瑞城 南貞方に至る、北馬木に至る、南門西貞方小島の間にあり、台を距る

千二百歩許り、延元二年源頼春此に居る。(略)池を穿つ三重、貞方、吉

住吉、音瀬、矢上、笠木、高房等皆羅城中に在り

ここには、広大な範囲におよぶ羅城の記載が見られる。文中の「池」について、仮にこれを「堀・濠」または「堀川」と解釈した場合、「三重」は南千間堀・北千間堀・館堀に比定することが可能である。しかしながら、この解釈によった場合、城館自体は単郭構造となり、『三好記』『南海通記』に見られるイメージを踏襲する小規模でマイナーな「勝瑞像」が採用されたこととなる。

このような認識が踏襲された理由としては、第一に、当該時期の勝瑞の現状からの影響をあげることができる。城館廃絶後の勝瑞は、慶長期から寛永期にかけての讃岐街道の西遷により流通ルートからはなれ、町場機能を漸次消失しながら農村化していったと考えられている。現地では三好氏菩提寺である見性寺が旧郭跡に移転して存続したため、農地の中に方形単郭の城跡のみが伝世されたことがマイナー評価の一因と考えられる。また第二として、『阿波志』の文献としての性格があげられる。徳島藩の藩撰地誌として編纂されたことから、蜂須賀入部以前の三好治世に関する過小評価があったのかもしれない。これに対して、「羅城」、いわゆる惣構については、域内の字名が継続したこと、また、南千間堀、北千間堀が水路として継続使用され地形が大きく改変されなかったことから、この時点まで伝承が残ったものと思われる。

(2) 郡村誌・郡誌から県史・町史へ

ここまで、近世に編纂された軍記物・地誌等の二次史料を素材に、各時期の人々が描いた勝瑞像をたどってきた。そのなかで、当初、大規模で発展的にとらえられていた都市像が、時代の経過とともに単純で小規模なイメージに変化する傾向にあることを確認した。このような都市イメージは、近代以降どのように受け継がれ、または変化していったのであろうか。ここでは明治以降、敗戦までのあいだに書かれた資料を記述年代順に検討し、近代における勝瑞像を明らかにしていきたい。

まず、最初の検討対象として、明治初年に編纂された『阿波国板野郡村誌』⁽¹³⁾を取り上げたい。ここには、

勝瑞城跡址 幅員詳ナラズ 本丸ノ址ト称スル地 本村ノ北方字馬木ニアリ 高凡壹丈 面積千三百坪許
堀アリ 回字形ヲ為ス 享保年間見性寺ヲ此地ニ移ス 南西ノ方ニ中廊ノ壕址アリ 坤ノ方凡六町ヲ距リ大
門ノ址称するアリ 細川三好の両氏統テ 此ニ居ル 天正十年長曾我部元親ノ為メ陥ル 阿波志曰 南至貞
方 北至馬木 西南門在 西貞方小島之間距臺千二百歩許(下略)

とある。この記述からは、まず、『阿波志』と同様に勝瑞城の主郭(本丸)を現在の見性寺境内に比定し、これを単郭の方形館ととらえていること、また、惣構の範囲についても『阿波志』の記述を援用していることがわかる。注目すべき点としては、勝瑞を建設したと思われる細川氏や、これに取って代わった三好氏も、ともに現見性寺境内に所在した単郭方形館を居城としていたと解釈していることがあげられる。『故城記』など近世初期の記載とは異なる解釈が成立していたことを読み取ることができる。

第二例目としては、大正一五年(一九二六)編纂の『板野郡誌』⁽¹⁴⁾の第二章「阿波諸城址(板野郡分)」の項を取り上げる。まず、勝瑞城跡に関する記述の冒頭で勝瑞の規模と構造について先述の『阿波国板野郡村誌』の記述を援用し、続いて『阿波志』および『三好記』の記事を引用している。しかる後に、

これらを総合して推察するときには昔の本丸の址に今の見性寺を建てられしものの如く見性寺及び天主村山の邊に至る一帯は勝瑞屋形の所在地にして廣さ凡そ二町四方に及びしならん、而して本城は吉野朝末期に属するものなれば鉄砲伝来後の築城法と其の趣を異にし構造寺院に近く本丸を除く外別に内堀などなかりしかば城郭の変遷もまた甚しからずや

と結んでいる。ここでは、近世後期以降の単純小規模なマイナーイメージが、そのままのかたちで採用されていることを確認できる。

三例目は昭和四年（一九二九）に発行された『徳島県史蹟名勝天然記念物調査報告』第一輯⁽¹⁵⁾の勝瑞城跡の記述である。ここでは冒頭で、

板野郡住吉村字勝瑞に在り。現今屋形と称する小高き地面と、其の外堀とを存し、地域四反許あり。城内には龍音山見性寺、三好大権現堂、並に三好家累代の墓石あり。其付近に天守址、雞場、お山、西町等の古名を存す

とした後に、『阿波志』の記述を引用し、

詮春屋形を構へしより以来十代、次ぎて三好三代、前後二百有余年、兵威四隣振ひ殷盛を極めたりしも兵變の為、高樓臺閣悉く鳥有に帰して、当年の繁華一炊の夢と化す。城跡の付近は田畑となり、僅に地名に當時の面影を偲はしむるに過ぎず。

と結ぶ。城跡付近に存する天守跡、雞場、お山、西町等の古地名の採録は注目に値するが、城館本体の構造については単郭の方形館とし、見性寺境内地をもって細川氏・三好氏共通の政治拠点とするなど、ここでも近世後期以来のイメージを踏襲していることが明らかとなる。

このようにして形成された戦前までの勝瑞イメージは、戦後、どのように継承され、また変化したのであろう

か。ここではまず、戦後の徳島県における歴史の集大成である『徳島県史』（昭和三八年発行）¹⁶に見られる勝瑞城関連の記述を取り上げ、検討したい。『徳島県史』第二巻第四章第一節に「勝瑞城」として、

貞治六年（一二六七）九月細川頼之は、將軍義詮の召により上洛するにあたり、阿波を弟の詮春の分国とした。詮春は勝瑞の居館を応安年間（一三六八―七一）に修補して居城とし阿波の守護所とした。

勝瑞はかつて初期小笠原氏の守護所の所在地井隈荘にあり、細川和氏は先にここに退隠し、居室に適料の額を掲げて風流吟味を楽しんだと伝えられ、詮春の居館もすでに此処に在ったのを修補したのである。

との記述があり、県史が勝瑞の前史を小笠原初期守護所に求めること、また、細川氏の守護所としての勝瑞成立を南北朝期とすることがわかる。次に県史は『阿波志』の記事を引用し、広域にわたる「羅城」を持つ政治拠点像を採用する。また、「羅城」中の中心区画については、

現在の龍音山見性寺のある所は小高くなり地域約四十アール、外堀をめぐらせてここが城の本丸である。

とする。以上から、県史は、守護所勝瑞の成立を南北朝期とするところに独自の見解を有するが、その範囲・構造等については基本的に『阿波志』の解釈を援用していることとなる。

次に県史の二年後に勝瑞の地元である藍住町から刊行された『藍住町史』（昭和四〇年発行）¹⁷の記述内容を確認しよう。この町史の勝瑞に関する記述の最大の特徴は、これまでの主な史料による勝瑞像を並記することにある。具体的には『阿波志』『昔阿波物語』『阿州古戦記』『三好記』等の記事を列挙する。それぞれの史料からの勝瑞像は、都市の殷賑を伝えるものや、単純・小規模な本拠像を語るものなど諸説が混在しているが、そのまとめとして、

何が真かわからないが、城の外方防御線は、勝瑞、矢上、音瀬、笠木、馬木、高房、吉成、東貞方、西貞方の広域に亘っていたらしいのである。

と、『阿波志』の解釈を援用し結んでいる。

以上、戦後に公的な歴史叙述として刊行された県史および地元町史の記載内容は、基本的に『阿波志』の記述を援用しており、広大な羅城の存在と小規模で単純な構造の本城という、近世を通じて形作られたイメージを踏襲しているといえよう。

(3) 科学的研究の萌芽

昭和四〇年代以降、県史、町史等の編纂事業とは別に、研究者個人による科学的研究の萌芽が見られた。ただ、勝瑞については、その規模や構造を直接的に示す同時代史料が存在しないこと、また構造確認のための発掘調査がこの時点ではまったく行われていないことなど、歴史学的な面からも、また考古学的な面からも資料的制約が大きいことから、とくに地理学的手法によるアプローチが行われたことに特徴がある。これは研究対象となる遺跡について、詳細な地形観察から立地条件を分析し、地籍図を解析することにより復原的に検討しようとするものであり、徳島県内における初期の代表的な研究として本田昇¹⁸氏、および羽山久男¹⁹氏の研究をあげることができ。ここに見られる「勝瑞像」は、精緻な地理学的考証から広域にわたる大規模遺跡として提示されており、主に伝承にもとづくこれまでの記述とは一線を画する意義を有するものである。また、これらの研究は、後述する全国の都市研究における歴史地理学の動向とも連動するものであり、後年の学際的研究の基礎をなすものとして評価することができる。ただし、勝瑞の中心区画については、資料等の不足から、あくまでも現見性寺に所在する単郭方形館との立場をとっており、その意味においては、『阿波志』によって確立された勝瑞像の延長線上にあるものといわざるを得ない。

あとがき

序章でもふれたが、勝瑞の発掘調査が始まって今年で二四年目を迎える。あと一年で四半世紀の節目である。この時間経過を人間にたとえると、生まれたばかりの幼児が国政選挙に立候補できるまでの期間に該当する。長い取り組みになったものである。発掘を担当した藍住町教育委員会には敬意を表したい。

さて、節目ということで考えると、平成二八年度には、もう一つの大きな意味合いがある。勝瑞における学際的な共同研究がスタートして一〇年の節目にあたるのである。共同研究は「守護町検証会議」の名称で、平成一九年度に始まった。当時徳島では、勝瑞を単なる城館跡にとどめず、その周囲に広がる寺院、町屋、港津などを含めた都市遺跡「守護町勝瑞」として捉え、総合的な活用方策を模索する方向で議論が進んでいた。そのためには、広大な面積を持つ「守護町勝瑞遺跡」の実態把握が不可欠であり、目的達成のためには、まず純粹に学術的な検討が必要であることから、徳島県教育委員会を事業主体に「守護町検証会議」が設置されたのである。

検証会議のメンバーは、各分野の全国レベルのエキスパートに参加を求めた。小野正敏氏（考古学）、仁木宏氏（都市史）、山村亜希氏（歴史地理学）、千田嘉博氏（城郭研究）の各氏であり、後に天野忠幸氏（政治史）が加わった。これに、地元からは平井松午氏（地理学）、須藤茂樹氏（文献史学）、発掘担当であった重見高博氏が入り、県教委が事務局をつとめた。会議は緊縮予算を反映し、年一回の開催であった。「まるで七夕さんみたいな会だなア」といいながら、平成二五年度まで七年間継続した。その成果が、本書のベースとなった『勝瑞 守護町検証会議報告書』（徳島県教育委員会、二〇一三）である。

このような検証会議での議論の蓄積をふまえて、各地の研究会との連携ももたれるようになった。平成二一年

には、仁木氏が世話人をつとめる一六一七会と連携し、検証会議の中間報告の位置づけで、「シンポジウム 阿波国勝瑞の空間構造を探る——守護所・戦国城下の館・寺・港」を実施した。県内外から多くの研究者が勝瑞を訪れ、踏み込んだ議論の場となった。遠来からコメントをいただいた坂本嘉弘氏、川岡勉氏や、一六一七会発起人の松尾信裕氏、大澤研一氏、山上雅弘氏には大変お世話になった。

平成二五年度、先述の『報告書』の刊行を以て、守護町検証会議はひとまずその役を終えた。一方、同じ年度に城下町科研（基盤研究A「中世・近世移行期における守護所・城下町の総合的研究」研究代表・仁木宏）がスタートし、徳島が研究会のトップバッターをつとめることになった。中近世移行期の都市をテーマとすることから、ここでも勝瑞研究が中心的な役割を担うことになる。集会は、「阿波の守護所・城下町と四国社会」のテーマで平成二六年度に行われ、これも大盛況のうちに終了した。県外からゲストスピーカーとして報告をいただいた、玉井哲雄氏、坪根伸也氏、山村亜希氏、佐藤竜馬氏、川岡勉氏、市村高男氏には、改めてお礼を申し上げます。

これら研究会の実施にあたっては、様々な準備会、検討会、勉強会がもたれた。試みに、これまで行われた勝瑞関係の勉強会をカウントしてみると、平成一九年度の検証会議立ち上げ以降、昨年までの時点で約四五回の会合が開かれていた。その時々ニーズに応じた会ではあったが、そろそろこれらの成果をひとまとめにし、世に問うべき時期がきているのではないかと実感した。

他方、我々が勝瑞研究を続けている間に、四国各地では研究成果の集成と公表が相次いだ。香川県における『中世讃岐と瀬戸内世界』（岩田書院、二〇〇九）や、高知県での『中世土佐の世界と二条氏』（高志書院、二〇一〇）などがこれにあたる。また、『日本中世の西国社会』①③（清文堂出版、二〇一〇・二〇一一）も刊行され、これに愛媛県の研究者の多くが参画するなど活発な動きが続いた。いわゆる「あとがき愛読派」の私など

は、これらの書物に記された、「日本一小さな香川県の若手研究者でも、この程度の成果を挙げられることを広く世に示し、各地で地道な努力を続ける仲間たちに希望を与えよう」（『中世讃岐と瀬戸内世界』岩田書院、二〇〇九）という力強い使命感や、「今回が処女論文となる執筆者の興奮の息づかいが感じられる」（『中世土佐の世界と一条氏』（高志書院、二〇一〇））といった新鮮な高揚感にふれるたびに、「いつかは徳島も」との思いを強くしたものである。

その「いつか」が訪れたのは、平成二六年度である。折しも、大阪市立大学の徳島合宿に同行する車中、仁木氏から、「石井さん、例の『報告書』は書物にしないのですか？」との問いかけがあったのである。正直、「待っていました」の思いであった。ただ、既存の『報告書』をそのままリライトし製本するのでは余りにもつたいないと考え、新たに関係する分野の執筆者を募り、「オール徳島」的な体裁をとることにした。このときの求めに応じて、福家清司氏、福本孝博氏、長谷川賢二氏、島田豊彰氏が、新たに執筆陣に加わった。また出版にあたっては、科研費の助成を得るため「独立行政法人日本学術振興会平成二八年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果公開促進費（学術図書）」に申請を行うことになった。原稿の執筆・編集に加えて、科研費申請手続きが重なり一時は繁忙を極めたが、めでたく申請は認可され、出版に向かつての条件が整った。編集段階では、諸般の事情により原稿提出が遅れるなど、気をもむ場面も幾多あったが、最後は執筆者諸兄の頑張りにも助けられた。

今ようやく総べての原稿が出そろい、本書が日の目を見る時が近づいてきた。生まれいずる書物は、はたして世の中に受け入れられていくのであろうか。内心、忸怩たるものがあるが、今はこれが精一杯の到達点でもある。江湖のご批判をお願いしたい。

よく思うことであるが、徳島は本当に小さな県（面積も、人口も）である。それに比例して研究者人口もまた

寡少である。仮にラグビーのスクラムワークにたとえるならば、絵に描いたような軽量フォワードということになる。これが、名にし負う重戦車フォワードと組み合わせるときの生命線は「バインディング（結束力）」である。先述の「オール徳島」や、気に入って使っている「徳島惣国一揆」の発想がこれにあたるものであり、これまでの研究集会や、今回の論集刊行も、この思いの延長線上にあるものだと考えている。本当に色々な方々のお世話になってきたのである。そして、これからもよろしくとお願ひしたい。

最後になりましたが、思文閣出版の原宏一氏、三浦泰保氏には大変お世話になりました。記して謝意を表します。

平成二九年一月 厳冬の中、春を待ちながら

石井伸夫 記す

年), 共著『神山町史』上巻(神山町, 2005年)。

福本孝博(ふくもと・たかひろ)

1972年生。徳島大学大学院総合科学教育部地域科学専攻修了。徳島県県土整備部用地対策課主任。
「室町期地方政治都市「勝瑞」の成立と変容——歴史地理学的景観復原による予察——」(『四国中世史研究』第12号, 2013年)。

長谷川賢二(はせがわ・けんじ)

1963年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退(日本中世史)。徳島県立博物館人文課長(学芸員)。

『修験道組織の形成と地域社会』(岩田書院, 2016年)。共編著『修験道史入門』(岩田書院, 2015年)。共編著『熊野那智御師史料』(岩田書院, 2015年)。

島田豊彰(しまだ・とよあき)

1972年生。近畿大学大学院文学研究科日本文化研究コース修了(考古学)。徳島県教育委員会教育文化課社会教育主事。

「勝瑞城館跡出土の銭貨——徳島県下の中世遺跡出土銭貨との比較——」(『出土銭貨』第29号, 出土銭貨研究会, 2009年)。「中世阿波の掬鉢・播鉢」(『真朱』第10号, 公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター, 2012年)。「古代・中世阿波の船着き遺構と流通・交通」(『史窓』第45号, 徳島地方史研究会, 2015年)。

天野忠幸(あまの・ただゆき)

1976年生。大阪市立大学大学院文学研究科哲学歴史学専攻後期博士課程修了。天理大学文学部准教授。

『戦国遺文 三好氏編』全3巻(東京堂出版, 2013~2015年)、『三好長慶 諸人之を仰ぐこと北斗泰山』(ミネルヴァ書房, 2014年)、『増補版 戦国期三好政権の研究』(清文堂出版, 2015年)。

平井松午(ひらい・しょうご)

1954年生。立命館大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得満期退学(地理学専攻)。徳島大学大学院総合科学研究部教授。

「洲本城下絵図のGIS分析」(HGIS研究協議会編『歴史GISの地平——景観・環境・地域構造の復原に向けて——』勉誠出版, 2012年)。杉本史子・磯永和貴・小野寺淳・ロナルドトビ・中野等・平井松午編『絵図学入門』(東京大学出版会, 2011年)。平井松午・安里進・渡辺誠編『近世測量絵図のGIS分析——その地域的展開——』(古今書院, 2014年)。

*仁木 宏(にき・ひろし)

1962年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程(国史学専攻)修了。大阪市立大学大学院文学研究科教授。

『空間・公・共同体 中世都市から近世都市へ』(青木書店, 1997年)、『京都の都市共同体と権力』(思文閣出版, 2010年)。共編『守護所と戦国城下町』(高志書院, 2006年)。

執筆者紹介（収録順、*は編者）

*石井伸夫（いしい・のぶお）

1959年生。大谷大学文学部史学科卒業。徳島県立鳥居籠蔵記念博物館学芸課課長補佐。
「中世阿波国沿岸部における城館の立地と港津の支配」（徳島県教育委員会編『徳島県の中世城館』徳島県教育委員会、2011年）、「守護町勝瑞遺跡における寺院の立地について」（徳島県教育委員会編『勝瑞 守護町検証会議報告書』徳島県教育委員会、2014年）、共著「中世後期における阿波の流通——煮炊具、石造物、港津の視点から——」（日本中世土器研究会編『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会、2012年）。

重見高博（しげみ・たかひろ）

1970年生。徳島大学総合科学部総合科学科（考古学専攻）卒業。藍住町教育委員会社会教育課主査。
「守護町勝瑞出土の土師器皿」（『中世土器の基礎研究』14、日本中世土器研究会、1999年12月）、「徳島県勝瑞館跡出土の貿易陶磁器」（『貿易陶磁研究』No.22、日本貿易陶磁研究会、2002年）、「阿波の守護所」（『守護所と戦国城下町』高志書院、2006年）。

須藤茂樹（すどう・しげき）

1963年生。國學院大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得。四国大学文学部日本文学科准教授。
編著『戦国武将変わり兜図鑑』（新人物往来社、2010年）、共著『戦国武将の肖像画』（新人物往来社、2011年）、編著『徳島県謎解き散歩』（新人物往来社、2012年）。

山村亜希（やまむら・あき）

1973年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。京都大学大学院人間・環境学研究科准教授。
『中世都市の空間構造』（吉川弘文館、2009年）、「室町・戦国期における港町の景観と微地形——北陸の港町を事例として——」（仁木宏・綿貫友子編『中世日本海の流通と港町』清文堂、2015年）、「戦国城下町の景観と「地理」——井口・岐阜城下町を事例として——」（仁木宏編『古代・中世の都市空間と社会』吉川弘文館、2016年）。

小野正敏（おの・まさとし）

1947年生。明治大学文学部考古学専攻卒業。国立歴史民俗博物館名誉教授。
『戦国城下町の考古学——一乗谷からのメッセージ』（講談社選書メチエ、1997年）、編著『図解日本の中世遺跡』（東京大学出版会、2001年）、編著『戦国時代の考古学』（高志書院、2003年）。

千田嘉博（せんだ・よしひろ）

1963年生。奈良大学文学部卒業。城郭考古学者。奈良大学文学部文化財学科教授。
『織豊系城郭の形成』（東京大学出版会、2000年）、「信長の城」（岩波新書、2013年）、「真田丸の謎」（NHK出版新書、2015年）。

福家清司（ふけ・きよし）

1950年生。愛媛大学法文学部（日本中世史）卒業。公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター理事長。
共著『阿波一宮城』（徳島市立図書館、1993年）、共著『図説徳島県の歴史』（河出書房新社、1994